



# 夢見の椅子

川崎ゆきお

久住はある夢を見た。その夢は忘れていた場所だった。

ほとんど思い出すことのない記憶へアクセスした感じだ。

久住が十代後半の頃、通っていた喫茶店の夢で、その夢を見ることは初めてで、それだけに気になった。

夢が何かを知らせているのではないかと思い、出掛けることにした。

と、いっても昔、実家のあった街で、何十年も行っていないし、また距離的にも遠く離れている。

夢に出てきたのは喫茶店だ。久住は新聞配達のバイトの帰り、その店へ毎朝立ち寄っていた。二年ほど通った。

すっかり常連となり、自分の席ができていた。スポーツ新聞や漫画を読みながらモーニングサービスのトーストをかじった。

その程度の記憶しか残っていない。人生に関わるような何かが起こったわけでもないし、興味深いエピソードもない。

だから、夢でいきなりその記憶に触れても、思い当たるような何かがない。

しかし、そういう時代もあったのだと思うと、懐かしく思えた。

どことなく開かずの間を開けるような嫌な空気もある。触れてはいけない記憶ではないが、夢で見たことで怪しさを感じた。

久住は翌朝駅に降り立つと、街の変わりようにただただ驚いた。実家のあった場所までの道も一変している。

久住は、もうあの喫茶店はなくなっているのではと半ば諦めていたのだが、昔とそれほど変わっていない状態で残っていた。

久住が見た夢は、喫茶店で休憩しているだけの何でもないシーンだ。

これは、内部からではなく、外部からのコンタクトかもしれない。そう思いながらドアを開けた。

そこにいる客たちに見覚えがあった。あの頃の常連客がまだいるのだ。

老人たちは久住をしばらく見つめていたが、それが久住だと分かったようで、それを確認すると週刊誌や新聞に目を戻した。

久住はいつもの場所に座ると、老婆がおひやおしぼりを運んできた。

四十年ぶりだ。

牛乳屋の大将や不動産屋の親父...彼らはまだここの常連なのだ。

久住は四十年ぶりに座る、その椅子に懐かしい温度を感じた。

夢を見させたのは、この椅子かもしれない。

了

